令和５年神奈川県議会第１回定例会 次世代育成・デジタル戦略推進特別委員会

令和５年３月６日

鈴木委員

私からは、頂いた資料の 13 ページにある自殺と、あとメンタルヘルスの対策について、ちょっと聞かせてください。

14 ページに書いてある心のサポーター養成講座というのは、私もざっと見させていただいて、実は国の５大疾病の中にある精神疾患という問題について、現場を回れば回るほど、大変につらい思いをされいらっしゃる方が大変多い。そこで、こういうふうに鬱病と言われる、例えば産後鬱もひっくるめて、その人口としては、かかられた方の数ってどれくらいいるんですか。

精神保健医療担当課長

鬱病ということになりますと、ちょっとすみません、手元に数字等を持ってはいないんですけれども、厚生労働省のほうが令和２年に調査をしました患者調査の結果によりますと、精神疾患の患者数というのが、本県では約 46 万人というふうに推計をされております。イコール鬱病ということではないんですが、このうち鬱病に含みます気分障害という疾患になりますと、16 万 1,000 人というふうに推計されているというふうに承知しております。

鈴木委員

16 万 1,000 人って大変な数だね、これ。私は、ここでもって、心のサポーター養成講座、心のサポーターになったんだけれども、このセミナー、抽せんして当たって行かせていただいたわけだけれども、内容というのは、国からの委託ということで、あなたに聞いてもしようがないのかもしれないけれども、内容というようなものについては、私は正直言ってちょっと落胆したんですよ。もうちょっと何か突っ込んだお話がいろいろあるのかと思ったけれども、中身というのは傾聴という、要はしっかり聞いてやってほしいという中身が中心だった。

ところが、これだけの人数がいて、例えば入り口と言われる鬱病と言われる方がいらっしゃって、神奈川県下 46 万人近い方もいらっしゃるこの病気が、県のいろんな施策見てみるんだけれども意外と触られていないよな。例えば、あんた方の自殺をひっくるめたかながわ自殺対策計画案て、部局のほうで今、常任で討議始まるんでしょう。これ見てても、さーっとしか書いていないの、これ。鬱病等についての普及啓発の推進と書いてあって、鬱病の知識と理解を進めるためのセミナーなんかを開きますよというふうに書いてあって、中身に課題として、私と同じで、県民の鬱病に関する正しい知識を習得し、適切な対処方法等について学ぶ機会が必要ですというふうに書いてある割には、実際の施策なんて、どこにも金ついていないんじゃないかと私はすごく心配しているの。これはどういうふうに捉えているの。

精神保健医療担当課長

鬱病ということの対策になりますと、今委員のおっしゃったように普及啓発というところが中心でございまして、例えば鬱病についての講演会を実施したり、あと鬱病について御理解をいただくためのリーフレットの配布などにも取

り組んでおりまして、特にリーフレットの配布につきましては、今年度からは薬剤師会の協力を得まして、薬局での配布といったようなことにも取り組ませていただいております。

また、あと実際に、鬱病の方が最初に体の不調を感じる場合、例えば眠れないですとかお腹が痛いといったような体の不調で、内科の先生のところにかかるようなケースもございますので、そういった内科の先生方に、鬱病について理解いただくような研修というのもやらせていただきまして、そういったところから精神科のお医者さんのほうにつないでいただくといったような取組もやらせていただいているところで、費用が比較的あまりかけずにやれるような実際の取組にはなっておりますけれども、そういったものをやらせていただくのと、あと先ほど来、お話が出ております心のサポーターの養成というのも、そういった御自身のメンタルについて関心を持っていただくというような意味合いで、あとほかの方のメンタルヘルスの不調なんかに気づいていただくという意味で、そういった心のサポーターの養成というようなものも取り組み始めたところでございます。

鈴木委員

今、課長さんさ、あなたのおっしゃったことというのは、そんな確認の話、私聞いているんじゃないんだよ。そんななんかいろいろやったんでしょうけれども、そういうようなことだけでもって、本当にこの大きな、ある意味では、県民の方々が、これだけの苦しんでいる状況下の中で、足りている本当に施策なのかと私は言っているわけだ。

何なのかというと、あなた方がここに書いているじゃん、鬱病というのは自殺の入り口なんだって。そういうふうに書いておきながら、内科医の研修をやりました。だって、心のサポーター、私のところで三、四十人しかいなかったよ。これでもって、鬱の方々等々に対する、要するに理解なんていうようなことは甚だばかばかしい話だと、私は思うんだけれどもね。今のあなたの施策、それやっていないとは私、言っていないけれども、要するに私の言いたいのは、マクロの施策がないんだよ。みんなミクロの話ばっかりしているけれども、マクロの話なかったら、課長さん、現場って知っている、どんなふうになっているか。現場ってあなたのぞいたことある、この鬱の方々のいろんな状況というようなものは、現場を、あなた、実際に臨床って見たことあるのかね。私が心配しているのは、言っておくけれども、時間もないから、先に、現場は、まず鬱といって何しろ知識がない。だから、失礼ですけれども、この前、私がサポーター講座行って、私の隣も専門の方だった、介護とかやっていらっしゃる。そういう方でさえ、ああいう、ああいうと言い方言っちゃいけないか。それぐらいの、ある意味では理解をするようなことでさえすごく喜んでくださっている。えっ、と私思いました。少なくとも私、インターネットとかいろんなところでもって勉強していったんですけれども、もうちょっと深い話があるんだろうと思ったらそうでもなくて、ワークショップばかりあった。

２つ目には、そもそもが、鬱の中の中心の薬物、お薬でもって治そうとするお薬を飲まないという問題もすごくあるわけ。そういうイロハみたいなことを、あなた方がもっともっと基本的に県民の方々に啓蒙していかない限り、どんな

にあなた方がこんなミクロの話してみたって、マクロとしての施策を、例えば県のホームページ、その他、例えばオンラインか何かでやるとか、心のサポーターで養成講座、多分、今年で終わるんでしょう、きっと。もうまだやるの。
精神保健医療担当課長
　心のサポーターの養成につきましては、国のほうで取り組んでいる中で、昨年度から、全国でモデル事業ということで、幾つかの自治体でやらせていただいておりますけれども、神奈川県はそれに手挙げをしまして、昨年度と今年度やらせていただいております。それで、モデルについては、国のほうでは３年間の予定をしておりまして、来年度も神奈川県としては、国のほうにはやらせてほしいというふうに手挙げをする予定でございます。
　また、その後、2024 年度からは、国のほうで、心のサポーターの養成というのは全国展開をしまして、10 年間で、全国で 100 万人の養成をするというふうに聞いております。
鈴木委員
　国は結構だって。だから、県はどうするんだと私聞いた中で聞いているのよ。だから、あなたのさっきからの話聞いていると、46 万人もいますよと。その中の十数万なのかもしれないけれども、イロハであるところの精神疾患ということに対して、この国の今までの歴史の中でもって、なかなか精神疾患というところに直接触る、そういう施策というのはないんだと私は思うの。５大疾病の中でも。精神科医も足りない、また、何かあったときにそういうような対応はどこへ行ったらいいのか。今現場でもって、例えば鬱の御家族、そういう方たちに、万々が一、あの養成講座だけでも聞いたならば、私、対応全然違うと思いますよ。
　また、２つ目には、薬というのは怖くないんですよ、脳の病気ですから、そこを少しでも和らげるんであるんならば、飲んだほうがいいんですよという意識を本当に植えることができたら、私もっともっと減ると思うよ。減るって、私、医師じゃないから分からないけれども。そういう知識のノウハウがないところに、こういう何か、だって、この方たちだって失礼ですけれども、年間数でいったら何万人になるわけはないだろう、これ。例えばこういう講演会やったって何したって、小さなところで多分やるんだろうよ、きっと、そんな大きな公会堂とかなんかでやるんじゃないだろうから。
　そういうところで課長さん、あんたがたが、こうやって字面でいっぱいいっぱい書いてあるけれども、現場で、だから、鬱の状況というようなものを入り口だと言っていながらも、そういう人たちは減らないんですよ。私が今まで現場を歩いてきて、私も講座を受けさせていただいて、ああ、こういうことを言っているんだなというのは、一応スペシャリストの方から私も聞いたら、例えば傾聴してあげてください、無茶なことを言わないで聞いてあげてくださいとか、薬というのは怖くありませんよ、人格が変わるわけじゃないですからとかというような、そういう申し訳ないですけれども、イロハみたいなことを県が発信していかないと、この鬱に対する要するに心の病というようなものは、もっとこれから私は増えていくんじゃないのかなと。
　これに関して予算があまりにもなんか、私からするととんちんかんなところ

に予算が行って、やれ、自殺者もこうするからああだこうだといったら、もちろん義務的経費なんだろうから、私これ以上文句は言わないけれども、そういう要するにマクロの施策というようなものをもっと考えていただきたいと思いますけれども、いかがですかね。
精神保健医療担当課長
　非常に心の病気、心の不調という部分に関しては、これまで体の病気ですとか不調に比べますと、やはり皆様の理解というのが、例えば体の病気であればどこかが痛いですとか、周りの方も、例えば顔色が悪いとかいうことで気にかけることが多かったと思うんですが、やはり心の不調とか心の病気というのは、御本人も気づきにくかったり、周りの方も気がつきにくい。また、御本人も気がついていても、ちょっと体の病気に比べますと、医療機関を受診したりですとか保健所に相談というようなところを、少しためらってしまうような部分というのがあったかと思います。
　そういった部分を、心の病気、心の不調に関しても早めに気がついて、御相談や治療に進んでいただくという意味での理解促進というところは大切だと思っていますので、今後、県のほうとしても、先ほどの心のサポーターも含めまして取り組んでいきたいと思っております。
鈴木委員
　いや、課長さん、そんな一方的なというか、一つの部分はそれはあると思う。２つ目には、じゃ、そういう心の病を持った方々に対してどう接していくんだという、要するに、私はマクロ政策がないというのも言っているわけだよ。あなたの言っているのは、いや、これから何が出てくるのか知らないけれども、私は厚生じゃないからさ、常任委員会じゃないからそんなこと言えないけれども、自殺対策の中にさらっとこうやって終わってしまう。それで、なおかつ、入り口というのは鬱病なんだというようなことを、あなた方が記述している割にはあまりに単発過ぎて、私なんかから逆に言わせてもらえば、まだ時間があるから、課長、少しやり取りしようよ、未病未病とあなた方言っているけれども、未病なんかのアプリなんか、かなり実質的に実用化どんどんされてきちゃっているよ。課長さん、あなた方が別にセミナーなんかやらなくたって、心のアプリみたいなのいっぱい出てきているというのが出てきている。先ほどデジタル戦略担当課長にお話ししたんだけれども、３月１日の東京新聞で、心の治療をアプリで気軽にという認知行動療法の入り口が出ていて、誰でも勝手にアプリどうぞダウンロードして使ってくださいなんていうのが出てきている。
　一体何をしているんだろうと、県としては、私からすると。未病だ、ああだこうだこうだと言っているけれども、一体こういう何ていったらいいのかな、私からいうと、古式ゆかしい、毎年毎年どこかからワードをペーストしてきたみたいな、こういう施策をいつまで続けているんだろうって、県というのは。
　私は、そこへ出なければ、私もセミナーに参加しなければ現状は分からなかった。だけど、現場を歩けば歩くほど、もう一度、課長さん、言っておきますよ。一つには、御当人に対する啓蒙と、もう一つは、その周りにいる方たちに、心の病ってどういうことなんだっていうようなことを、あなた方がきちっとマクロ政策で出さないと、失礼ですけれども、自殺の方たちがこれぐらいですみ

たいなことを出していて、こんなことをやっていますみたいなものまで、ある意味きつい言い方したらごめんなさい。あなた方の言い訳でしか私ないと思うよ。これで何人の人が救われるんだよ、これ。俺なんか、本来だったらここへきちっと数字出せって。46 万人のうちの 16 万人のうち何人が、来年度の予算でもって、この方たちに対する何らかの改善点が見られる、きちっとした数値を出せと本来なら私言いたいぐらいだよ。そういうあなた方は緊張感がないんだよ、こういうのを見ていても。だらだらだらだらと書いてあって、ここに書いてあるだけで、字面ばっかり書いてあるんだよ。中身どうなんだと。

だって、ここに、実績であなた方が言っていた 46 万人、具体的には、これだけ心の病って、5 大疾病と言われているんであるならば、課長さん、あなた方、神奈川県としてだって、この問題というのはどれくらいの入り口で、鬱の患者さんがどれぐらいいるんだって調査したっておかしくないじゃん。何でしないの。入り口、分母である。課長さん、どうですか。まだ、時間もう少しあるから。

精神保健医療担当課長

鬱病の患者さんということでの、先ほどまずは御答弁していないのですが、そもそも気分障害というのは、ほぼほぼ鬱病の方が大多数を占める。ほかには躁鬱病という方も中にはいらっしゃるんですけれども、気分障害の患者さんが先ほど 16 万 1,000 人とお答えいたしましたんで、鬱病の患者さんは、ほぼこれに近い数字なんだなというふうに把握しておりますので、改めて県として、数をちょっと調査するということは考えておりません。

鈴木委員

あなた方が、要するに入り口だというふうに言っているんであるならば、自殺対策だって、今言っていたメンタルヘルスの問題だって、基数というものがあって、その中からどのように施策をしてくるかというのが本来の道筋だろう。それがなくて、毎回毎回、計画一つ一つ見てもそうなんだけれども、分母がないんだよ。分母がないで、これやります、あれやりますと書いてあるのは結構だけれども、それによって何人が救われるんだって、私がぱらっと見ただけだって、年間で何回、例えば 300 人か 400 人の会場で毎日やるわけではないでしょうから。そこに触れる人だって、どんなに多くたって 1,000 人から 2,000 人くらいでしょう。その方たちのために、こうやって文章に一生懸命書いているんだよ、これ。

これで片や自殺対策です、鬱病、あなたが、いや、鬱病とは書いていませんよと、この中ではとおっしゃったけれども、そもそもあなた方が、ここに鬱病という言葉をちゃんと書いているんだから、そういう言い訳は立たないということを言っているの。だから、さっきから私、あなたにそのことを聞いているんだよ。

だから、常任委員会じゃないからこれ以上私言わないけれども、課長、まずはきちっと基数を一つ決めて、その中からどのようにしていくというマクロ政策を出すということをお願いして、私、じゃ、終了いたします。